Photograph: [William Forsythe] © 梶山 克美、[Tatsumi Hijikata] © 吉野 章郎

ウィリアム・フォーサイス × 土方巽

身体のイラストレーション

2011年11月11日[金] - 12日[土] - 13日[日]　東京ドイツ文化センター

11-12-13 NOVEMBER, 2011 GOETHE-INSTITUT TOKYO

WILLAM FORSYTHE ※TATSUMI HIJIKATA ILLUSTRATION OF THE BODY

Dance Symposium and Workshop featuring William Forsythe and Tatsumi Hijikata. Information is available in English on website. http://www.art-c.keio.ac.jp/event/log/332/

[主催] 東京ドイツ文化センター、日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部、慶應義塾大学アート・センター

[協力] 慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター、立教大学現代心理学部佐藤一彦研究室
株式会社フローベル、株式会社計測技術研究所、NPO 法人舞踏創造資源、亀村 文彦、亀村 佳宏

GOETHE INSTITUT

Dance Producing Society

フォーサイスとダンスのメディア・ツール

What else, besides the body, physical thinking looks like?
「肉体のことは別にしても、いったい身体的な思考ってどんなものなんだい?」フォーサイスのこの発言からすべては始まったと、オハイオ州立大学で "Synchronous Objects" をフォーサイスと一緒に作ったノラは言う。"Synchronous Objects" はフォーサイスの『テーブル・ダンス』(通称) を分析的に解題して自由にイラストレートした具体例で web 上で誰もが無料でアクセスできるようになっている [http://synchronousobjects.osu.edu/]。

ダンス/データ/オブジェクツ、この 3 つをつなぐ "Synchronous Objects" は、フォーサイスの作品がどう作られているかを、主にアラインメントや動き始める que に着目して (動きの質 quality of movement に、ではなく) データ化し、そこからイラストやアニメというオブジェクツへと立ち上げていく。身体的思考 (physical thinking) をイラストやアニメを使って Objects (作品) として視覚化して具体化すること、あるいは思考の視覚的な具体化を通して、ダンスという「見えない」思考のパターンを「見える」ようにする「分析」と「創造」の営為。

1994 年ドイツのカールスルーエ・芸術メディア・センター (ZKM) と一緒に作った『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』は、フォーサイスの特異な動きのヴォキャブラリーを辞書のように「動きの貯蓄 (motion bank)」をすることを第一の目的にしている。教則本ではないとニック・ハフナーは明快に言うが、これがフォーサイスの動きの一般的な普及につながったことは間違いない。この『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』は当時 ZKM の総力を挙げて、メディア・ツールがどのようにダンスのヴォキャブラリーを呈示できるかという、コンピュータ処理によるインタラクティヴな新しいこころみにチャレンジしたのだったが、"Synchronous Objects" は舞踊作品の構造を、現在可能なメディア・ツールがどこまで具体化して、実際に映像的に応用処理することができるかを示している。

ダンスはメディア・ツールを、単なる記録保持用としてだけでなく、また創作の補助ツールとしてでもなく、本格的な作品分析のツールとして使い始めた。

—— 松澤 慶信

「舞踏譜の舞踏」とその映像表現

ジャン・ジュネの思想と生き方をレバレッジとして始まった土方巽の舞踏は、1968 年の《肉体の叛乱》で一つの頂点を迎える。ヨーロッパの思想や文学をモチーフに、ヨーロッパの芸術を手法に、ヨーロッパのさまざまなダンスのコンビレーションとして成立した。

この 1968 年が結節点とも転換点ともなって、土方巽は新しいダンスの開発に向かう。

土方巽が 1970 年代に開発、創造した「舞踏譜の舞踏」(Notational Butoh) は、それまでのダンス史上にみることのなかったメソッドによる舞踏の修得と表現のための画期的なシステムに基礎づけられている。

「舞踏譜の舞踏」とはいえ、そこには、正しい意味での舞踏譜はなく、「舞踊譜 Notation」とも「図譜 Score」ともいいがたいスクラップブックやノートなどが舞踏譜として残されているのみである。

身体の動きを示す「図」もなく、時間の推移を示す「譜」も記されていない。

しかし、時に具象的な、時に抽象的な、あるいは詩的で、あるいは即物的な言葉が加わって、それまでのダンスの「振付」という概念を離れて、ダンサーに「動き」の形象を促す、新たな身体表現のためのメソッドとして機能する。

この「舞踏譜の舞踏」のマトリクスとなるのは、土方巽が創造した「動き」である。森羅万象を踊りにしようとする土方巽の意志は、数千をはるかに超える膨大な数の「動き」を開発した。

そのすべての「動き」に名前が付され記号化されることによって、システム化されたメソッドが成立した。舞踏は構造化され、身体、時間、空間を統合し、さらにダンサーの意識をコントロールする土方巽の魔術的舞踏の形成である。

土方巽アーカイヴでは、この「舞踏譜の舞踏」の構造と本質を解明するために「動きのアーカイヴ」を構築するプロジェクトを進めている。

土方が創造した「動き」をすべて映像化し、映像のコレクションを作成してきた。さらに、「動き」の創造のためのリソースやコードを調査し、生成のプロセスを分析して、メタデータを加えることによって、映像によるノーテーションの構築をめざしている。

記号のコーパスと身体の時間が交錯し、与えられた「動き」が内面化してダンサーの実存とシンクロする反表現的な土方巽の舞踏の世界を、テクノロジーとしての映像がどのように表象できるのか。試みであり挑戦である。

—— 森下 隆

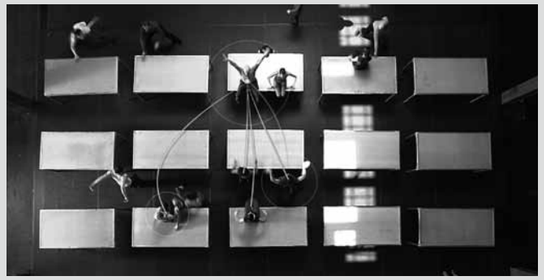
会場/お問い合わせ

【会場】東京ドイツ文化センター
107-0052　東京都港区赤坂 7-5-56　(地下鉄青山一丁目駅 A4 出口から赤坂郵便局方面へ徒歩 5 分)
Tel. 03-3584-3201 Fax. 03-3586-3069　http://www.goethe.de/tokyo

【お問い合わせ】慶應義塾大学アート・センター
108-8345　東京都港区三田 2-15-45　Tel. 03-5427-1621　Fax. 03-5427-1620
ac-sympo@adst.keio.ac.jp　http://www.art-c.keio.ac.jp/

シンポジウム + スクリーニング

メディア・ツールと身体×ダンス



11 月 13 日 [日]　14:00 – 17:00　入場無料

スクリーニング

フォーサイス「Synchronous Objects」
ノラ・ズニガ = ショー
Hijikata Method 動きのアーカイヴ Extra Version
和栗 由紀夫 + 土方巽アーカイヴ (森下 隆)
[映像制作] 亀村文彦、亀村佳宏

シンポジウム

ダンスメソッドとメディアテクノロジー
—— 身体表現・ノーテーション・映像表現

【パネリスト】
クリストファー・ロマン、ノラ・ズニガ = ショー、和栗 由紀夫
藤幡 雅樹、松澤 慶信　[司会:渡部 葉子]

身体をダンシングしたり、身体をイラストしたりすること。ここにはどんな問題があるのか。この問題設定の核心をついてダンスの最先端を走ってきた土方巽、そしてこの問題に今なお果敢に取り組むフォーサイス。この二人をメルクマールに交差させつつ、それでは今度はわたしたちがこの問題を設定して探ってみたい。

パネリストのノラは Synchronous Objects の総監督、クリストファーはこのプロジェクトの中心的リサーチャー。彼らにまずこの Synchronous Objects のプロジェクトからプレゼンテーションしてもらう。次に土方巽に学んだ和栗は彼の舞踏創作をイラストレーション化したが、彼と舞踏資料のアーキヴィストである森下が土方の舞踏をイラストすることについてプレゼンテーションする。その後に彼らをまじえて始まるシンポジウムに、CG の世界的な制作者でもある藤幡と、フォーサイスの『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ』の日本語版を監修した松澤が加わり、近現代美術研究の渡部とともに進行をあずかる。身体を、ダンスをイラストすることの意味、意義、そしてこれからの展望。議論が飛び交い戯れつつも、何か見えてくればお慰み。乞う御期待。

ダンス・ワークショップ ——そして 21世紀へ

今回の企画テーマである身体をイラストすることのもっとも直接的な営為は、身体を使ってダンシングすることに他ならない。この身体のイラストレーション化をまず自らが自らの身体で体験してもらうためにワークショップを開くことにした。和栗は土方舞踏を舞踏譜に跡づけた土方の弟子だが、彼は土方が身体をどうイラストしたのかをワークショップする。一方、ノラとクリスは Synchronous Objects プロジェクトのまさに中心人物だが、彼らにはフォーサイスのダンス・ヴォキャブラリーを教授してもらう。

ワークショップ A

11 月 11 日 [金]、12 日 [土]　13:00–16:00
【講師】ノラ・ズニガ = ショー、クリストファー・ロマン
【定員】20 名 (先着順)
【受講料 (2 日間)】2,000 円 (見学 1,000 円)

ワークショップ B

11 月 11 日 [金]、12 日 [土]　16:30–19:30
【講師】和栗 由紀夫　【定員】20 名 (先着順)
【受講料 (2 日間)】2,000 円 (見学 1,000 円)

ワークショップ・ディスカッション

11 月 12 日 [土]　20:00–21:00
ワークショップ受講者と講師によるディスカッション
【対象】ワークショップ A,B 受講者、見学者のみ (自由参加)
【受講料】無料

受講条件
- A、B 各コースとも 2 日間続けて受講できるかた
- ワークショップ A は、ダンス経験のあるかた
- A コース見学は各日 15 時からのみ受講可能
- B コース見学は両日とも最初から受講可能

【ワークショップ A】フォーサイス・ワークショップ

われわれは『ウィリアム・フォーサイスのインプロヴィゼーション・テクノロジーズ』(2000) によって彼の特殊なダンス・ヴォキャブラリーを自習できるようになっている。しかしこのソフトの目指すところはフォーサイス風に踊ることを身につけることにあるのではない、と彼も言う。彼の語彙を通じて自らの身体の可能性を探るよすがにしてくれと言っているのだ。ノラ & クリスの WS もそうだ。自分の身体を自覚するきっかけとなれば幸甚。

【ワークショップ B】舞踏ワークショップ

和栗由紀夫は 1970 年代を通じて創造された土方巽の舞踏のメソッドを継承し、国内外で実践的なワークショップを数多く行っている。
土方巽の「舞踏譜の舞踏」についての理解の確かさと巧みな指導で定評があり、今回のワークショップも、豊かな経験に基づき、土方舞踏を基礎から指導するとともに、その方法を理論的に教授する絶好の機会となろう。

申込み方法

慶應義塾大学アート・センターウェブサイトの申込みフォームより
お申し込みください (受講料は当日精算です)。
http://www.art-c.keio.ac.jp/event/log/332/

クリストファー・ロマン　Roman, Christopher

Symposium, Workshop

クリーヴランド・バレエ学校でダンスを正式に学び始めてから後はスクール・オブ・アメリカンを経て、パシフィック・ノースウェスト・バレエ団を皮切りに数々のバレエ団で踊り、ついにフランクフルト・バレエ団そしてフォーサイス・カンパニーに入団。退団後は、フォーサイスの作品の振付アシスタントをしつつ、バレエ教師やインプロヴィゼーション・ワークショップの指導だけでなく、自らもマルチメディアな作品を作る。Synchronous Objects のプロジェクトの中心的なリサーチャーである。大学でのダンス指導も数多くこなしている。

ノラ・ズニガ = ショー　Zuniga Shaw, Norah

Symposium, Workshop

アメリカ合衆国にて、異なる学問分野や異なる文化を横断する創造性のありかとして振付を捉える作品を発表。ウィリアム・フォーサイスとマリア・パラッツィと共同した最新のプロジェクト「Synchronous Objects」は、2009 年に Wexner Center for the Arts およびウェブサイト上にて発表され、ニューヨーク・タイムズ、コミュニケーション・アートにて特集された。また、RHUR2010 の依頼により、「Synchronous Objects, reproduced」を制作。世界各国で講演活動、教育活動を行うほか、オハイオ州立大学ダンス学部准教授、ダンス・アンド・テクノロジーコースの責任者をつとめる。

和栗 由紀夫　Waguri, Yukio

Symposium, Workshop

1952 年、東京生まれ。「舞踏」の創始者、土方巽直系の舞踏家。72 年に土方巽に師事してから今日まで、江戸小紋の染職人として働いた 8 年間をはさみ、25 年以上の舞踏歴をもつ。師没後、数年間の海外での公演活動を経て、90 年より自らのグループ「和栗由紀夫+好善社」を主宰、東京を中心に群舞やソロの作品を発表し続けている。ダンサーとしてはもとより、ことばを通して身体イメージを喚起する土方舞踏独特の「舞踏譜」を使った振付法の継承と展開、群舞から演劇や音楽などとの共同作業、緻密な作品の構成などにより、振付家、演出家としても高い評価を受けている。

藤幡 雅樹　Fujihata, Masaki

Symposium

東京藝術大学大学院映像研究科教授。デジタル・メディアの可能性を追求し、インタラクティブ・アート、ヴァーチャル・リアリティー、ネットワーキングといった分野を横断し、これまでのメディアにはないさまざまな問題を、非常に特異な哲学とユーモアに溢れた作品やプロジェクトを通して発表し、国内外で高い評価を得ている。個展「不完全さの克服」は、2006 年に CCGA (日本)、08 年にはコーナーハウス (イギリス) にて展示。09 年の「Simultaneous Echoes」で芸術選奨を受賞。1995 年新しくできたパークタワーホールで松澤企画によるフォーサイスを交えたシンポジウムに参加した。

松澤 慶信　Matsuzawa, Yoshinobu
日本女子体育大学舞踊学専攻教授。舞踊美学、舞踊史学。ダンスへの突き抜けるような快感に満たされて早 30 有余年。監修著『ウィリアム・フォーサイスのインプロヴィゼーション・テクノロジーズ』(2000)、共訳著『ダンスは国家と踊る』(2010) 共に慶應義塾大学出版会、監修著『現代的なリズムのダンス指導』フラックス・パブリッシング (2010)、監修著『ドイツ・ダンスの 100 年』(1996)、監修著『フランス・ダンスの 100 年』(1998)、監修著『英国ダンスの 100 年』(2000)

森下 隆　Takashi, Morishita
1972 年より、土方巽のアスペスト館にて舞台制作に携わる。1986 年の土方巽の死後、土方巽記念資料館の設立と運営に参画。土方巽をめぐる展覧会やシンポジウム等の企画・構成を行う。現在、慶應義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴを運営。慶應義塾大学非常勤講師。NPO 法人舞踏創造資源代表理事。著書に『土方巽　舞踏譜の舞踏—記号の創造、方法の発見』、共編著に『土方巽の舞踏—肉体のシュルレアリスム　身体のオントロジー』。

渡部 葉子　Watanabe, Yohko
慶應義塾大学アート・センター教授/キュレーター。専門は近現代美術史。東京都美術館、東京都現代美術館において、現代美術を中心に展覧会活動や研究活動を展開。2006 年より現職。アート・センターが所管する土方巽、瀧口修造、油井正一、ノグチ・ルーム等のアーカイヴ活動に関わり、戦後芸術のアーカイヴ化の問題に取り組んでいる。